

## 『長野県短期大学紀要』最終号に寄せて

上條 宏之

『長野県短期大学紀要』の最終号、第73号が刊行されるので、前学長として一言書くように依頼された。率直な感想を書かせていただくことにした。

長野県女子専門学校から長野県短期大学に移行した1950年（昭和25）の7月に創刊されて以降、第73号まで継続された『長野県短期大学紀要』は、公立知的機関としての長野県短期大学が教育・研究の場である基本的存在意義を照らし出す重要な鏡であると、わたしは考える。

創刊号から第10号までは年2回発行、1957年（昭和32）1月発行の第11号からは原則年1回の発行となったという。紀要掲載の内容をみると、最終号は、近年の紀要と同様、特集ではなく、総合科学系と総合文化系の二分類に依る「論文」と「研究ノート」から構成され、通常の編集といってよい。当然ながら、ありのままの長野県短期大学の研究・教育体制を映し出すスタイルである。

わたしは、18年間の学長在任中、高等教育機関の認証・評価にあたって、研究活動にかかわる状況について公立短期大学唯一の報告書を作成し、認証・評価機関による評価を受けた。わたしは総合型公立短期大学として、わたしの地域史編纂にかかわった経験もあって、学際的・総合的に地域課題に取り組むには学際的・総合的共同研究があるべきではないか、と考えていた。したがって、学科・専攻内部の共同研究、学科・専攻を超えた共同研究が出来れば、という想いがあったので、認証・評価に教員の皆さんの研究活動にかかわる取り組みをお願いしたのであった。

紀要には、専攻内部の共同研究は一部見られたが、複数の専攻、複数の学科の学際的共同研究の成果は現れなかった。長野県短期大学が大学としておこなった学際的共同研究は、紀要以外に数例のこされている。それを継承・発展させることが出来なかったのは、わたしの学長としての問題提起の不十分さも映し出しているように思える。しかし、短期大学にもかかわらず、教員と学生との共同研究には見るべき成果があった。

73号にわたる紀要が、長野県短期大学そのものが果してきた歴史的評価とともに、どのように今後研究成果を評価され、これからも活用されていくのか、期待を込めてその帰趨を見守りたい。

